

菅江真澄隨筆集

——
内田武志 編

東洋文庫

東洋文庫

143

平凡社

菅江真澄隨筆集

内田武志 編

うちだたけし

内田武志 明治42年秋田県生。日本常民文化
研究所員として、「静岡県方言誌 1・2・3」
「日本星座方言資料」「菅江真澄未刊文献集 1・
2」,ほかに「真澄遊覧記総索引歳時篇」「松前と
菅江真澄」「真澄遊覧記抄・秋田の山水」「菅江真
澄の日記」「菅江真澄遊覧記」(全5巻)などの編
著あり。現住所 秋田市手形山崎 9-24

'72.5.21
真田 宜矢 

菅江真澄随筆集

東洋文庫 143

昭和44年7月10日 初版発行

定価 500 円

検 印

編 者 内 田 武 志

省 略

東京都千代田区四番町4番地

発 行 者 下 中 邦 彦

発 行 所

東京都千代田区
四番町4番地
振替・東京29639

株式 平 凡 社
会社

落丁・乱丁本はお
取替えいたします

印刷 東洋印刷株式会社
製本 株式会社石津製本所

© 株式会社 平凡社 1969

0139-801430-7600

装幀
原

弘

凡 例

一 本書は、菅江真澄の自筆本を底本とした。ただし現在、自筆本が未発見である「筆のまにまに」は写本によった。

二 本書は菅江真澄の随筆原文の抄録である。なお、読解の便を考慮して、若干の校訂を試みたところがあり、その主要な点は次のとおりである。

1 真澄は漢字を書くとき、同じ字を繰り返して用いない場合が多い。それを、できるだけ原文どおりとした。例えば「筆のまにまに」の題名でも「筆^{フデノマニマニ}随意・布傳能萬邇麻耳・ふでのまにまに」となっている。

2 送り仮名の捨て字はすべてそのままにした。

3 底本では句読点が、だけで示してあるが、本書ではこれにとらわれず、文意により、・で区別し、また補正を試みた。

4 全文に濁点・半濁点を施した。原文には記されているものも、いないものもある。

5 底本のふりがなはカタカナであるが、読みにくいかな、あるいは読み誤りやすい語句に編者がふりがなをつける場合は、ひらがなとした。

6 置字は、〈記号以外は現行の形に改めた。

7 底本の文字や語句の誤記・誤脱と思われるところは、原則として原本どおりとし、必要に応

- じてその箇所、補正、または説明を（ ）内に記しておいた。
- 8 引用文、和歌、会話などを示すときは、その上下に「」を付した。また、真澄の著書名にはハ、その他の書名には『』を付した。
- 9 底本の割注、および傍注の部分は、《》内に組んだ。
- 10 万葉仮名で書かれた人名・地名などの、わかりにくいものには、（ ）内にあて字をした。
- 11 底本の傍点はそのままに記した。

目次

水の面影

三

筆のまにまに

三〇

しのはぐさ

二三

久保田の落穂

二五

かたる袋

一四

ひろめの具

一七

發掘の家居

一六

新古祝甕品類之圖

一九

解説（内田武志）

二三

あとがき

二七

菅江眞澄隨筆集

內田武志編

水みづの面影おもかげ

以イ天波デハの國、率浦イザウラの莊寺裡サウテラウチの郷、高清水タカシミの岡の邊ワタは、いとく舊跡フルキトコロぞ多かる。そが中にも十あまり八の名だたる地を舉トコロていへれど、そのゆるよしをことく、それとつばらかに知るてふ人しもあらねば、其處に滞トドマりてかれに問トひこれに尋ね、また、としたかき里の老人オキナが聞キときき、傳へと傳ふる古物語ムカシモノガタリを榮シヨリとたのみて、それをしるべの絲口とたどりて、しらぬ山わけ衣、きさらぎのはじめつかた、此里に住む鎌田ノ正家マサヤカ、梅花湯ウメノハナユ售る屋ヤドのあるじ、童ワラハなどいざなひ連れて、寺内テラウチの里根笹山の坂の上、堂場グウニハといふ處をつとめて出たつ。いにしへ此あたりはみなあら波の來寄キヨりたりし磯邊にて、眞木マキのいやたつしげ山なりしよしをいへり。此處に

神龜・天平テンビヤウの御代のころほひより關ヒラケたりし舊道フルミチ仄ホノに残り、永徳・應永のなかむかしに往復カヨヒたりしふる道あり。また近き萬治のはじめならむ、踏フミめしといふ今道ありて、玉くしけふたたび三たび驛路ウチヤチもふみかふれるよしをいへり。今街道を東に入る小徑ミチあり、是を綾小路といふ。こは皇都にもおなし名に呼ぶ處マコなり、ゆるよしやあらむ。此あやの小路ぞいにしへさまの道なる。萱カヤフケ葺るささやかなる家ども篠生ササフの中に隣近う所せきまでならびたり。ここなむ、その世は梅のいと多くして鶯の聲も乏しからず、誰も聞けむ、「梅の花ちらまくをしき我そのの竹の林にうくひすの鳴く」と、しかすがにをしまれけむ、むかしの春も偲しのばれたり。梅の眞盛マサカリなりしころは日かげまばゆく、目もあやに見なすより、いひそめし名處ドコロならんかし。綾の小路の、またの名を獅子舞小路ともいふ。これをおもふに、出羽・陸奥のくぬちことく、猊首シシカシラをふりかざし頭カウベをいただき、笛吹、つづみうち、歌舞ウタマヒをして肆中イチナカをとよめかし、はやし

もてありく。それが「綾の小路から獅子が舞ふてま
 りた」と唄ひ、「青柳の絲より係カケてよりかけて梅
 も櫻も春は花さくく」とうたふ。此唄もところ
 くにていささは、ふりことなれどもなべてはし
 かり。此郷サトの榮えたりしむかしの神事カミワザのときは、古
 四王ミの神輿ミサキの御前ミサキをはらひ、まづ此小路より追ひも
 て渡りたりしより、文アヤの小路、獅子舞小路といふ二
 ツの名ぞありける。此うたひものもまことは、韓
 國クニからと唄ふべかりしを、あやの小路、あらやの小
 路と舌だみ訛ヨコナハりもてうたふは、みちのく、いでは
 ぢもしかり。さりけれど此處ココに名有る綾小路は、故
 由ヨシありげにぞ聞えたる。此あやのこをぢをなからば
 かり行ユケば、左ユミの方に六右衛門カサといふが家あり。此
 家の後シリなる地トコロに、むかしの梅園ウメノソノの跡とて畠ナリと變て、
 今この篠生ササフの内に圍カコふ。そのむかし、こころの梅を
 殖ウツにうゑて、ここに花さくころは、いとく嚴重イッソウシヤウ
 柵カキゆひめぐらして、ひねもす夜もすがら花守して是
 を守らせ、盛りとなれば、花見んと村々里々の人さ

はにゆすりみちて群れ至り、歌よみ詩をふし絲管イトダケを
 しらべて、二月雪シケチノユキとうたひ、梅落ハナチルべくと樂アソびし處と
 いへり。俚人トコロヒトは、柵ササの梅、又梅屋布ウメヤシキといひ傳ふ。寶
 曆、明和の春までは柵の梅も二本三もとは老木オキなが
 らも枯れ残り生タチて、春ごとに荅コタめる色はうす紅にし
 て、八重も一重も枝さしかはして、花咲ぬれば雲か
 あらぬかと思まがふばかり、枝高う花は深雪フカユキのいや
 積ツミるごとく、その花の薰カク都事バンシキ、こと木の梅の似る
 べうもあらざりしなンド、しらぬむかし、見ぬ世の
 梅の花ものがたりを聞つつ行ユク々、かまだの正家マサヤカ、
 うめぞののむかしの春をかたりつぎいひつぎ句
 ふ人の言の葉
 此いざなひ連ツれたる童ワラハの「花ぞむかしの香に匂ひ
 ける」と、なにのこころもなうふとずんじ出イデたり。
 こや、むかし淀のわたりのまだ夜ぶかきにと、女の
 舟にずんじ出たりし心地もかくやと、こよなうおも
 しろし。あらたによみいでなんこともあたはじと、
 これにはぢらひて口をつぐみぬ。此童ワラハとちからくら

べもにげなかるべけれど、ただに止^やみなむも、ほる
なからむな^ンど人のいへば、折^{オリク}句歌を作る。

うくひすはめでこし梅のやとりとてしらぬむか
しをきてのみぞなく

武藏ノ國ノ大江戸なる藍川正恭が『雪の不留^{ふるみち}道』

に、「梅やしきといふところをたづねて至る、城ノ
介^{サネスエアノミ}實季朝臣、ここにあそびて梅をめで歌をよまれけ
るところとて、今もしかいひ傳ふるになむ。右の方
に入もてゆけば岡をうしろにかまへて、かやふける
家まばらにたちておくまりたる處なり。いづれ梅は
ととへば、畑うつをとこ、手をこまぬきて、近きこ
ろまでは花のあるじも家居して侍りしかど、おとろ
へぬるのち、いづちへまかりつともさだかならずと
かたる。梅もかくばかり侍りしかど、それも久しう
なりぬれば今はその根さへあらず。その跡はたしか
にここに侍るとをしふ。人々いとかひなき心地して、
ややためらひてまかてぬ。わたつみのくなどにかは
りぬるためしはさるものにて、ところもかはらずな

がら、跡なき事を今さらにはかなく、たれもたれも
いふめり。朽のこるむかしをとへは梅が枝のありし
家さへさだかにもなき」云々と見えたり。

此綾小路を出はづれば、ささやかなる門田いくひ
らとなく隔て、雪のむら消えたる南の岡に、古四王
ノ神社^{ミヤシロ}、としふる木々どもの生ひふたぎたる中より
あらはにそれとは見えざらねども、正面^{マホ}は北方^{キタザマ}にむ
けて作りすゑ奉るとはしられたり。窟門^{イハト}ノ神・住吉
ノ神、此二柱の神社は、横ざまに千木^{ちぎ}・片曾木^{かたそぎ}もそ
むき／＼てぞ見渡されたる。こなたよりこそ、むか
しは詣で道はありつらめ。ふりむく右よりは、小澤
といふ山路に入りて、次装野^{イザ}ノ原^{ワケイシ}に分出るといふ。
この去來野^{イザノ}は、『倭名抄』に、率浦^{イサ}と有る地^{トコロ}の、野
と變化^{ナリ}なれば、率浦^{イサウラ}を伊謝野^{イザ}とはいへるにや。又海
近き地は率浦^{イサ}にて、海遠かたの原をいざ野とはいひ
つらむか。某^{ナニ}にまれ、こは率浦^{イサ}の古名^{コソノ}ならんかし。
北方の岡を鐘撞長峯^{カネツキナガ}とて、古四王宮の洪鐘樓^{カネド}の跡あ
り、むかしさばかり廣かりけるみやどころとぞ知ら

れたる。此より北をさして殖野といふ處に出たりし
 ほど、ふみわらはの足とくものもて来る、なになら
 むとて、とき見れば、正家の親なる翁、千里ノ介正
 安、此三とせ斗り、かくびやにあり、此あしのけに
 なやみて、けふなん人々とともにえいでたたざりし
 事を、一ひらのふみに、いたくくやびもて、其書のお
 くに、「いざともにゆかましものを野路山路おも
 ひやらるる春のたのしさ」といふ歌、ひとつをかい
 のせり。此返し、

言の葉はともにいざなふおもひして見るにたの

しき春の山ふみ

かくなむ、もて來し文章の裏に書付てやる。幣探
 り束ねさしたる古墳、二ツ三ツならびたるあり。此
 あたりは、れいき（靈龜）、てむびやう（天平）のこ
 ろなる道にして、今もかたばかり踏み残る也。され
 ばかかる舊壘などいにしへの幣嚮ノ神にてもやお
 ましまりつらむか。しばしとて休らへば、巽の中に
 御城のいと高くいちじろくぞ見やられたる、これを治

ます君がみいづ、御徳を萬民恐み、尊敬、祝壽奉る
 なり。久保田の田面、野外とおぼしくて、しら綾一
 反ばかりも引延へたらむやうに残りたる雪の中より、
 けぶり饒しう霞とともに立なびきたるに、榮行御
 代の風ぞしられたる。遠き高峯に雪のきら／＼照れ
 るは由理河ノ邊の堺、女米來ノ山、みねより尾より
 つららぐ、雪のやま／＼は、かぞへもつきじ。海づ
 ら近く霞わたるは百三段の浦、又、由理ノ郡の浦々、
 梓弓矢橋の里はいと近う、勝平山の麓行々御食川、
 古の柴の渡といひけん水も此渡に落けむ。其あたり
 は霞ふかくてわいだめがたし。行かふ小舟の霞の水
 尾を見えみ見えずみいふべうもあらず。猶あきたら
 ぬながめに時うつれば立ぬ。左の方に群立つ松の、
 田の中までさし出たる片岨を苗秀、又、種浸といふ。
 うべも苗代の種浸てむ所か。むかし大きに早して稻
 田こと／＼に枯はてたりしが、此山田のみ八束の穂
 波たちなびき、田の實よく刈りをさめたる物語をせ
 り。

やがてまた早苗さなえや探トらむたなひちに水泡すいぱかきた

れ山田作る子

右に、離れ山とて、一群松ヒトムラツの田の上へまで枝さし
おほひ立て、うきたる嶋のごとく、ささやかな山な
がら姿ことに目とどまれり。そこなむ、むかし獅子
の雷電ライデンといふ人すめり。すもをさなンどにてや有り
けむかし。こなたに近う谷を隔て見ゆるを、兒櫻こさくらの
岡とて木々ふかし。むかし古四王宮大祭ありしとき、
四月八日、兒儼チゴノミとてあそびありし所と云ひ、又、兒
櫻とてめでたき花のありしよしをもいへり。今もこ
と櫻にても花やあらむ、いつ咲てむものかなンどイ
めば、ゆくりなう雨のふり來ぬ。

春雨のふるは草木のかぞいろはこやちこさくら
めぐみたつらし

左の方に、生根オヒネが澤とて廣き池あり。こは、近き
ころ、雨なきに岸キシくづれ水ただへたり。十とせ斗先サキ
に身まかりし六十斗ムソバカリの老女の物語に、おのれ歳は十
三斗ならん、其田へ晝飯ヒルイヒもて行し事をおぼえたり。

一代ヒトシロあまりの田のたちまちに大池となりしとて、う
ちむれ見に行たる也。田主は、わか父の作りし田な
れば能ヨク知りき。木の根の如き物、水底に在るをもて
生根オヒネといひ、田の實やこぼれけむ、稻の生ひたる事
もあれば、生稻オヒネが澤ともいふといへり。ここをしま
らく隔たりて、將軍濱といふ處あり。そこも今は廣
野と化ナりし、其野中、今道の傍に烏からすが池といふ水ふ
かき池ありしが、此池水いつとなく涸れはつるや、
此生稻オヒネの池水のみちくゝて、今は、おひねの池の心
ふかさはかりもしらず、ただ湖水のごとく、魚涌き、
鴨あさり、鴉カモのうき巢も作りなむ、水沙ヒロクと見えた
り。猶行右に蟹澤カニサワといふを見おろす。田の畔くろごとに、
いまだ雪の消えもやらず風いと寒し。

澤の名のかにはさくらの咲く色を見せて木の間
に残るしら雪

此道は、往古のままなる道にして、今有る高野と
いふ村のあたりを経て、泉川のわたりまで行かひせ
し事となもいへる。槻館つきだてといふ處に至る。ここに小

塙^{カキ}ところあり。ここなむ、大同のいにしへ、坂上大宿禰田村鷹、柵^キを作^{タテ}、官軍^{ミイクサ}を集め給ひたりし舊跡^{フルアト}といへり。今は畠^ナの字となりぬ。これをおもふに、秋田營といひしは此地^{トコロ}にやあらむ。『三代實錄』卅四卷、「元慶二年十月十二日云々、是日陸奥權ノ介、從五位下大上ノ大宿禰好蔭、率^ニ兵二千人、自^ニ流霞道、至^ニ秋田營、云々、鎮守府將軍從五位下小野ノ朝臣春風、九月廿五日、率^ニ軍四百七十人、來^ニ秋田營以北、即言、曰春風、重含^テ詔、先入^ニ上津野、云々」同書卅五卷、「元慶三年正月三日云々、出羽國飛驒奏言云々、又渡嶋夷首百三人、率^テ種類三十人、詣^ル秋田城、與^ニ津輕俘囚、不連賊者百餘人、同共皈^ス慕聖化、云々、去年九月十五日、好蔭來^レ自^ニ流霞路、二十五日、春風來^レ自^ニ上津野、是時道路泥深風寒肅烈經^ニ過嶮岨、士卒疲勞、云々」と見えたり。これを考ふに、流霞道^{カスミナカレノミチ}とよむべし。出羽陸奥ノ南部津輕人は、某長峯^{ナニナガネ}、某長嶺^{クレナガネ}といへる事を、もはら、なにながれ、くれながれとぞいふめる。そのいにし

へ、いへるも霞長峯ならむを、ながれとや聞なしたまひけむ。そを、からぶみの記^{カキ}さまにしるし給ひけむものか。其霞長根といふは、いまだ考得ざれども、みちのくの山路ならむか。また秋田ノ郡北比内ノ莊岩瀬・早口の山奥に霞山あり、又、霞橋といふあり、そはいとく高き峯なり、いにしは往來^{カヨヒ}し處なりといへり。霞の橋とは、霞長峯に掛りし山棧^{カケバシ}などにやあらむ。上津野^{カムツノ}は、みちのくにして今鹿角^{カツノ}の郷あり。上津野の加都能^{カツノ}とはなりたりけむ。かの岩瀬・早口よりは四、五里の奥山といへり。此寺内山の槻館^{ツキタテ}よりは三日四日ばかりの道ならんか、又、むかしは直路^チなくて、いと遠く巡りけむ、又、道ぬかり風寒クして路のはかくしからざりしにや。とまれかくまれ、流霞道は霞長峯^{カスミナガネ}ならむかし。猶眞跡^{マホナルトコロ}を人にとはまほし。秋田城は今ノ古四王宮の鎮座^{オウシ}の地ならむ。其邊もみな地動^{ナギ}にふりこぼされて、いにしへさまの處にはあらざるべし。槻楯^{ツキタテ}は田村將軍ノ陣營の跡を、すなはち秋田ノ營といひけむ事とおもはる。此あた

りの人は城にまれ柵(に)まれ館にまれ、むかしよしありげに住なしたる跡しもあれば、館のみぞいへる也。この畠毎に石弩のいと多く、霹靂石など産るとて、人みな拾ふ。仁明天皇ノ御世、承知(和)のとし、あるは宇多天皇の御宇、秋田路に石鏃の雨たりし事、紀にも見えたり。さるゆゑをもて、出羽國には石鏃多かるよしをいへり。いづれの國にも多かる石弩ながら、出羽は此石の名に負ふ國ならむか。瀧池といへる小池あり。此池、むかしは水面廣く池の心も深かりしとなむ、よしある處といへり。御休山といふ岡あり、國守ここに休らひ給ひて眺望おはしたるよしをいへり。此岡に登れば太平嶽山形の蛟龍に似たれば、をろちねともいふ。邇陪兎山《仁別村あり、仁別とは文字なしつれど、そはもと木別てふ蝦夷辭にして木材の生ふる川てふこと也》いとく近きは萬固山《天徳寺の山の號を萬固といふ》なんど、峯もそがひも雪のしらくと零つづく。白坂山は、雪の名におふことちせられて、ながめい

と寒し。其處なむ、白坂右近太夫某ノ柵の跡あり。其麓には、小菅野の渡の跡、猶其近きに朝日山東園寺といふ天台の古寺の跡あり。又、根笹山の東麓、油田《古四王宮のみともしの油の代に城之介實季寄せ給ふ田也》の近きにも、夕日山西園寺といふ天台の寺ありしといへり。朝日ノ長者、夕日長者とて、とみうどありし、その兩戸の家の菩提寺なるよしをいへり。なほ、寺々の數多かる、其寺々の中なる里なれば寺内とはいふ也。笹岡、四ッ屋、飯岡などの屋戸々々、また、泉・水口・神田などの民家くぞ、いとく多かる。こや、「ちはやふる神田の里の稻なれば月日とともに久しかるべし」と詠るは中納言國房卿の歌也。こは、旦波の國に在るてふおなじ名所也き、なんど誦語らひもて、行くくイて、正家ものにかいつく。

秋は又はつ穂手向むちはやふるかみ田の里にもゆる苗代

とよめる、ややたね蒔なむといへば人みな、はと

わらふ。野村・西村・蕨岡などいふ小村どもものうち並て篠生の中にぞ見えたる、そはおしなべて八柳ノ郷とはいふなむ。

雪消なば軒端に折らむかけろふのもゆるわらびの岡のへのやと

こち／＼と、方言して呼ぶ柳は、いといちばやく木のめ春めくこちと、此柳を手折る人あり。こち／＼の枝とは槻ツキの事ともいふか。童は、をちこちなヲサナコトバンド稚詞にもいへり。

梓弓やもとの柳春風になびきて霞む遠近のさと八柳長門守某、湊ノ九郎定満にくみして、このうまいくさをいだして、山本ノ郡《古ノ山本郡は今の仙北郡也》河北庄、霧山城を襲オウひたりし天正の世のいくさ物語りあり。生稻が澤の池《生ひ稻が池とも、いはば云ひてむかし》のもとに、ふたたび出たり。或アルヒトノイハク云、ももとせの前の母帳サキウバチャウとて、田書タフミシルシに記たるは、此池はもと寺内の民家、平兵衛、彦右衛門と兩人が佃フタリツクリたりし田地といへり。此事前サキにも云ひし

が、精ツバラカに亦云ひつる也。なほ分ヶ來れば小坂あり、名を龜背坂キハイといふといへり。そは龜形山カノヤマに類ふよしをもて龜背坂を字音に名附は強言シヒゴトならむか。けはい坂は化粧坂ケベヒを訛ヨコナマりいふならむ、化粧坂はいづこにも／＼多かる坂の名也。古、此坂を踰コえて八柳の城サ下トに通ひたりし路トコロといふ。そは廓サトの入口に衣紋坂あるがごとし。いささかの水渟タムりあり、鶴が池といふ。むかしは池の心もふかりしよしをつたふ。此處よりは、ひむかし北《行程三里》アタリに中て、新城岩見守シロノアトの古柵跡シロノアトとて遠からず見ゆ。そはおなし秋田ノ郡岩城村に在り、其城山の麓にも鶴が池、小鶴の（池）とてならびてあり。又、陸奥の名處ナトコロにも、「千代を住む子鶴の池しかはらねば親の齡をおもひこそやれ」とよめる重之の歌にもしられたり。ところ／＼に在る池の名也。此寺内の鶴が池の舊名は、面影オモカゲの池とも、倅オモカゲの水ともいひて、池の神にもの手酬タムケて祈れば、吾アが戀オモふ人の倅の水にうつり、おのれとも立るがごとし。又、命ヨネヒ長からむ人は水の倅の色